

# 徒然草の「草子」的性格

井 手 恒 雄

## 一

兼好法師は、徒然草第七十五段に、酒のことをあれこれと述べているが、徒然草諸抄大成の著者はそれについて、次のようなことをいつている。

大全ニ云ク、酒ノステガタキコトヲ兼好ノカカレタルハ、是草子ノナラヒナリ。仏説ナドニハ万人ニ通ジテ加様ノ事ハナキナリ。シカレドモ一人ノ手前ニテハ酒ヲユルシ給フコトモアリ。此説一理トイヘドモ兼好本意ニカナフベキカ、イカガ。

諸抄大成の著者は、徒然草大全の説をかかげた上で、それは一理はあるが、はたして兼好法師の本意にかなうものであろうかと、疑問を投げかけているのである。諸抄大成

の疑問はそのままで終っているが、われわれはこのような評論の語から、何を讀みとるべきであらうか。

わたしは、この諸抄大成の評語から讀みとるべきものは、第一に、大全の著者の文芸としての徒然草の本質に対する、その当時としては卓越した理解であり、第二に、諸抄大成の著者の無理解であると思う。そのことについて以下に述べてみたい。

わたしは、大全の説の中でまず注目すべきは、この段は兼好法師が酒の捨てがたいことを書いたものであるという、その認識のしかたであると思う。捨てがたいというのは、徒然草のこの段に兼好法師自身も「かくうとましと思ふものなれど、おのづからすてがたきをりもあるべし。」と言っているところであるが、それはただ、酒にも益はあるということではない。酒などは捨てよ、という教えがある、その上で、いや捨てがたいものであるよ、というのである。酒を捨てよ、という教えは、すなわち仏教であ

る。その仏教なり仏説なりを向こうに置いて、兼好法師は、何となく酒の捨てがたい折もあろうよ、といっているのである。大全の認識は、その点で全く正しいと思われる。

大全の説で次に注目すべきは、こんなことは一般論としては仏説にはないことであるといつて、兼好法師の言うところを仏説とは異質のものであるというふうに認識していることである。大全にいう、釈迦はそれぞれの場合に即応して飲酒を許容したことはある、しかしいわるる仏説そのものとしては、万人に通じて酒を飲んでよいとは決して言っていない——と。これは、大全の説のすぐれた点であると同時に、諸抄大成の至らないところであると、わたしには思われるのである。

諸抄大成の著者は、大全の著者の真意を理解し得ないままに、大全の説は一理あるようであるが兼好法師の本意にかなうものであろうか、どうであろうと、疑った。兼好法師の言うところが仏説とは異質のものであるという、大全の著者のすぐれた理解の域にまで達し得ない諸抄大成の著者は、結局次のようなところにとどまらざるを得なかったのである。

偕、此節ノ結句ニ論アリ。新注曰、酒ヲ飲ハ万ノ戒ヲヤブリ、地獄ニ落ベシ。又酒ヲ取テ人ニ飲セタル人ハ五

百生ガ間手ナキ者ニ生ルト仏ハ説玉フトアリ。古ヨリ酒ヲノミタル沙門、唐和ニ名僧ヲホシ。又ノマセタル人手ナキ者ニ生レハ、世ニ手ナキ人多カルベキニ、ソレモナシ。仏説トイフトモ更ニ信ジ難キ如何。答テ曰、釈迦ノ本意ヲクワシクシラヌ人ハ、皆ウタガヒヲマヌカレ難シ。仏説ナレバトテソノ分ノミニ心得テ、活シテ見ル事ヲシラネバ也。活シテ見ルト云ハ、常ヲハナレ、変ニ応ジ、其意味ヲイカシテ見ルゾ。常ヲノミ守テ変ノ理ヲシラヌハ、柱ニ膠シテ琴ヲヒクガゴトシ。仏ノ説ハイマシメナリ。カクイタクイマシメズンバ皆酒ニヨボレ心ヲミダサントアラカジメシリテ、右ノゴトクニイヘリ。サレド、ヨキホドニ飲ベシ、若クルシカラズトユルシタラバ、酔狂人カギリアラジトノ本意ナルベシ。ミダレヌホドニサヘ用レハ、仏聖人ノ意ニカナヘリ。イカントナレバ、夏ノ禹ヤ周公ハイタクイマシメ玉ヘドモ、或ハ天地山川ヲマツリ、先祖ノ宗廟ニ事アリ、冠婚ノ礼ニモナクテハ有ベカラズ。又釈尊ノトキモ末利夫人ト祇陀太子ニハユルシテノマシメラレシトナリ。又参考ニハ（略）。此説モ一理アリトイヘドモ、前説ノスナホナルニハシカズ。

諸抄大成の著者は、徒然草新注の一説をかがげ、それを徒然草参考の説と対比した上で、すなおであると言っているのであるが、その新注の説と、それを支持する諸抄大成

の見解とは、どのような意味で大全の理解に劣るのであるか。

それは前にのべたように、兼好法師の言うところが仏説とは異質のものであることを理解し得ているか否かの相違であるが、実はそれが今日徒然草を論ずる人々の間に見られる相違でもあるのである。それは、われわれが今日徒然草をどう理解すべきかという、根本的な課題と無縁ではない。いな大いに関係のあるものである。

両者の相違をやや詳細に検討すれば、次のとおりである。

酒は適当に飲むべきであるというような教えは、仏説にはない——、大全の説は、はつきりしている。ところが新注とか諸抄大成とかの言うところは、そうではない。それは、仏説を活かして解釈すれば、結局釈迦の教えの本意にかなうものとなる、そう言うのである。そういうことは仏説にはない、というのと、それは仏教の精神に副うものである、というのでは、話は逆である。両者は相対立する。それは何を意味するものであろうか。それは今日徒然草を享受するに際しても、相対立する二通りの考えかたがあり、それはどちらでもよいというようなものではないらしく思われる、ということである。

新注では、昔から名僧といわれる人で酒を飲んだ人が多いとか、仏説には酒を取って人に飲ませた人は手のない人

間に生まれるというが、世間には手のない人は多くないではないかとか、おもしろい設問をしているが、せつかくの設問が生かされていないのは、残念である。ほんとうは、こういうものは一箇の宗教批判として相当の意味を持つべきものであろうか。新注では、そういう疑問は、仏説を活かして見ることを知らぬものであるという。「常ヲハナレ、変ニ応ジ、其意味ヲイカシテ見ル」などというのは、ことばは美しいが、所詮あらゆる誤解を正解であるかのように見せかける、詭弁なのではあるまいか。仏の説は、いまいしめである。酒を飲むなど、嚴重にいましめなければ、人はみな酒におぼれて、心を乱す。だから酒を飲むなどいうのである。はじめから、酒は飲んでもよい、飲むなら適当に飲め、などというものなら、酔っぱらいだらけになるというものである。ほんとうはしかし、乱れぬほどにさえ用いれば、仏の本意にもかなうのである——。こういう発想はどうであらうか。「常ヲノミ守テ、変ノ理ヲシラヌハ、柱ニ膠シテ琴ヲヒクガゴトシ。」などと、いかにも仏説は融通をきかせて解釈しなければならぬもののようにであるが、ほんとうはそういうふうに融通をきかせて解釈した仏説は、もはや仏説ではないのではないか。

今日徒然草を享受するに際して相対立する二通りの考えかたがある、と前に述べたが、それは言ってみれば、研究者・読者の宗教観の問題である。徒然草を取り巻く仏教的

環境とそれに対する兼好法師の姿勢とについて、人によつて考えの相違があるのである。その相違は、人々の仏教というものに対する考えのちがいから生じるのである。たとえば今日僧侶が酒を飲むことについても、仏教の飲酒戒というようなものは過去のものになったのだと考える人と、僧侶の飲酒の中に仏教の真精神が生かされているのだと言う人とがあろう。そういう相違が兼好法師の酒の論に関連して、はつきりした形であられるのである。わたしに言わせれば、徒然草第七十五段のよさは、仏教の飲酒戒が支配力を持っていた中世の社会で、その飲酒戒を向こうに置いて、酒もまたよいものだということを知るが、言つてのけたところにあると思うが、そういうことも、中世の社会の宗教的環境における飲酒戒のきびしさというものを知つてこそ理解できると思うのである。乱れぬ程度に飲むのは仏の教えにもかなうものであるというようなことを言っているかぎり、昔も今も徒然草のほんとうの味はわからないと思うのである。

## 二

わたしは、前掲の大全の説の中で、最も注目すべきは、「是草子ノナラヒナリ」の一語であると思う。前に、大全の著者が文芸としての徒然草の本質を理解し得ていると言

つたが、この一語は端的にその事実を示すものであると思うのである。

大全の著者には「文芸」（あるいは「文学」という概念の持ち合わせがなかった。その代りに、かれには「草子」という意識があつた。つまり「是草子ノナラヒナリ」は、こういうところが徒然草が文芸作品である所以である、というところである。

大全の著者の「草子」の名における文芸への理解（それは、端的にいえば、徒然草は文芸作品であるという理解である。）を見てみよう。

徒然草の第五段は、「北の屋かげに消え残りたる雪のいたうこほりたるに、さし寄せたる車のながえも霜いたくきらめきて云々」にはじまる、王朝好みの優雅な一段であるが、この段について、大全に次のようにいう。

コレマデ一二段ハ、女色ノ艶ニ面白キ体ヲウツセリ。  
サノミ人ノ教ナド云ニモアラズ。加様ノ事アルニテ草紙  
ト云ナリ。

これは、次のような中世的解釈に対して意味を持つものである。諸抄大成に掲げられた一説であるが、この段に「人ばなれたる御堂の廊」に「なみなみにはあらずと見ゆる男」が女となげしに腰かけて物語りしている光景が美し

くみやびやかに描かれていることについて、次のようにのべているのである。

此段ヲ見テ兼好ハ色好ミナリトイハン者モアルベケレド、ソレハ以ノ外ノ僻事也。此草紙ハ心ニウツリユクコトヲソコハカトナク書ルヤウニ聞ヘナガラ、皆以底意ニハイマシメヲ含テ書リ。此段一マヅ好色方人ニナリテ書ナガラ末ニイマシメン為也。前ノ色好ザラン男ハトイヘル段ト同ジ意ナリ。サレバ仮初ニ書シコトモ是勸善懲惡ヲ本トスルナリ。

大体、この第百五段を読んで「兼好ハ色好ミナリトイハン者」があるであろうかと疑われるところであるが、かつて徒然草の読者はそういうことをまじめに考えていたのである。ほんとうに兼好法師を「色好ミ」だと考えるものもあり、兼好法師を「色好ミ」だというのは以つての外の「僻事」だとたしなめるものもあつたのである。注意すべきはその双方がその根底において案外通じるものを持っていることである。すなわち、一方は兼好法師を不善だといひ、他方は一見不善に見えることがらも実は見せかけで人を善に導くための方便であるという。双方に通じることはといえば、それが本音であるにせよ見せかけであるにせよ、兼好法師のことばは「色好ミ」のそれであり、それは

不善であるとするところである。それは、この種の作品をすべて「勸善懲惡」の眼で見ようとする偏見にほかならないが、大全のよさはそれに対して、「サノミ人ノ教ナド云ニモアラズ」と、道学的な、あまりにも道学的なその偏見をおさえ、「加様ノ事アルニテ草紙ト云ナリ」と、文芸作品としての徒然草の独自性を指摘したところにある。それは不幸にも諸抄大成の著者には理解されず、「山案此説イカガ。後人此ツレヅレヲ学ブ者ハ前説（前掲ノ一説）ニシタガフテヨロシカラン」といわれる始末であつたが。

徒然草第百九十段は、「妻めといふものこそをのこの持つまじきものなれ」にはじまる、問題の多い段であるが、大いに次のようにいつている。

此段ハ万ニイミジトモ色コノマザラント云段ト同意ナリ。人ノ教ニアラズ。然レドモ好色人ハ此風流ヲコノメルナリ。カヤウナルコトアルニテ草紙トハイフナリ。アヤマルベカラズ。

ここでも「草紙」の語が、実に巧みに使われている。徒然草を「草子（紙）」と呼んだ人は、他にも多い。前掲の諸抄大成の一説に、「此草紙ハ心ニウツリユクコトヲ云々」というなど、その一例である。が、それで以つて徒然草の文芸としての特性をこのようにみごとにいいあらわし

た人は、大全の著者以外には見当たらないのではないか。兼好法師はどうしてこんなことを書いたのであろうかと、人々は疑問を持つ。そしてある人は儒者の立場からいかにももつともらしい理屈をつけ、ある人は仏者の立場からつじつまをあわせようとする。しかしもともとこの段など当時の人間の本音として愛すべきものではないのか。こんなことが書かれているところが「草子（紙）」の「草子」たるゆえんではないか——、大全の「草子（紙）」の語の使用なり、文芸作品としての徒然草の本質的なものへの理解なりは、全くすばらしいものではあるまいか。

この第百九十段の「まして家のうちをおこなひをさめたる女、いとくちをし。子などいできてかしづき愛したる、心うし云々。」というあたりについて、増補鉄槌に「子をもふける事は世間にめでたきなどいひて喜ぶことなり。それをよからぬやうに書なせる、是の草子の名譽なり。」という。「是の草子の名譽なり」は徒然草の核心を言い得ているようであるが、大全の明快さに及ばないのではないか。

「カヤウナルコトアルニテ草紙トハイフナリ」の意識を欠くとき、徒然草の享受はかたよつたものとなる。諸抄大成にいわく、

山案ズルニ、夫婦ハ人ノ大倫ニシテ、シカモ夫ハ外ヲ

治メ、妻ハ内ヲトノヲルヲ以テ、第一トセリ。故ニ大  
学ニモ詩経ヲ引テ（略）。シカルニ兼好此所ニテマシテ  
家ノウチヲオコナヒ治メタル女イト口惜ト云ルハ、如何  
ナル心ト案ズルニ、彼家人ニ宜シキ婦ハ当時アルコトヲ  
不レ聞。ヤヤモスレバ嫉妬ノ心ヲ出シテ家人ヲセメセタ  
ゲ、剩、夫婦ノ中モ遺恨タユルコトナキ族、世ニコレ多  
シ。タトヒ嫉妬ノ心ウスクシテ家内ヲ能治ルトモ、其夫  
吾妻ヲバ本尊ノ如クニタツトミ守リ居ルトキハ、必以テ  
奢移ノ心出テ、閨門ノ内乱テ、家ヲ亡ス媒トナルナリ。  
サレバ牝鶏ノ晨スルハ家ヲ亡スノ相ナリトイヘリ。古今  
君子ノ治メ難キコトナリトイヘルハ、閨門ノ内ナリ。孔  
夫子モ唯女子与小人為難食、近之則不孫遠之則怨ト宣ヘ  
リ。

このような評語がはなはだかたよつたものであり、それがいわば中世的偏見そのものであることについては、いまさういうまでもないが、こういうものの中で徒然草が大学や詩経とどのような関係にあるものと考えられているか、その点は確かにしておく必要があるようである。結論からさきにいうと、徒然草のよさ、尊さ、ありがたさは、それが大学とか詩経とかいう儒教の經典——というのが過言であればイデオロギーとしての儒教といいかえてもよい——とは異質のものであるところにある。それはまさに大全の

著者が「アヤマルベカラズ」というとおりである。ところが右の評語では、徒然草がそれらの儒教經典——あるいはイデオロギーとしての儒教そのもの——と同じ系列において論ぜられ、決して異質のものとは考えられていないのである。ほんとうのところ、この段のごときは大学や詩経、——あるいはそういうものによつて代表されると考えられるイデオロギーとしての儒教そのもの——を離れて味あわなければ、その味はわからないのであるが、それができていないのである。「牝鶏ノ晨スルハ家ヲ亡スノ相ナリトイヘリ。」とか、女子と小人とは養いがたしとか言い出し、全体が儒教の立場からの独断的な批評になつてしまつているのである。

こういう場合、別に儒教から離れて物を見たり考えたりしようとする動きがないわけではない。しかし儒教に偏しなければたちまち仏教に偏するということになつてしまうのである。増補鉄槌に――

古抄云、此段ヲ儒書ノ法令ヲ以テトヤカクイヒサマタグル時、少ノタガヒモ侍レドモ、世教ヲハナレテ論ズル時ハ、大切ナル段ナリ。其故ハ、世ヲステ仏道ニヲモムカントスル人モ、ヲホクハ妻子ニヒカレテ其本意トゲガタシ。此段ノヤウニ平生ヲコナハバ、其道ニ入ニヲキテ世ノホダシヲホカラン者ヨリハ、イトココロヤスカルベキ

ニヤ。

この段は、儒教道德のごとき普通一般の教えを離れて論ずるときは大切な段である、というところまではよいが、そのあとがいけない。儒教からは解放されたが、仏教的思考の制約からは到底離れることができなかったのである。

いわく、世を捨てて仏道に赴こうとする人も多くは妻子の恩愛にひかれて出家の本意をそこなうものである。この段のような態度で平素から女性に接しておれば、仏道に入りながら愛着の念の強い人よりも、気楽だというものである——と。もしこれが、儒教を離れよ、仏教をも離れよというのならおもしろい。しかしそうではあるまい。仏道に入りながら愛着にとらわれて出家の志をとげ得ない人よりも、女とは不即不離の關係を保ちつつ世を過ごす人の方が、むしろ得道の域に近いのではないか、というのではあるまいか。もしそうなら、それは仏教に対する一種の妥協である。愛する女をかこつておいてときどき通うのがよいなどというのが、仏教の精神であるはずはない。しかし、そういうことが何となく仏教の精神に副うものであるかのように錯覚しているのである。それが妥協なのである。世には仏教の精神にかなうものとそうでないものがある——この当然の事実が理解できず、仏教というものを広義に解してすべてをその中に押しこんでいく。きびしい仏教の戒

律を向こうに置いた発言、などというものの存在について、  
気づき得ない、一種のあいまいなものの感じかた、考えか  
たなのである。

### 三

酒の段に戻る。

こういう段に関してもわれわれは何を感じ何を考えるべ  
きかという問題があるが、最初に掲げた諸抄大成の中の大  
全の説はその問題についてどのような示唆を投げかけるも  
のであろうか。また大全の著者による徒然草の「草子」的  
性格の指摘はどのような意味を持つものであろうか。

普通に徒然草の読者は、第七十五段を読んで何を感じ  
何を考えたかと問われるとき、次のように答えるのが常で  
ある。

まず感じたことは、酒に酔うた人の醜態というものは昔  
も今も変りがないということである。またこの時代からす  
でに今日のような酒の飲みかた、酒宴のありかたがあつた  
のかと思うと楽しい。われわれが日常生活において経験す  
るようなことが徒然草の中に描写されているのを知って古  
典というものを身近かに感じた——、とある人は言う。こ  
の段の前半には、非常にきびしく酒の害を述べ立ててい  
る。しかし後半に入ると、一転して酒の興趣を説いてい

る。そこには兼好法師のおおらかで暖い心、酒に対する理  
解といったものが、よくあらわされている。論に多少の矛  
盾があるともいえるが、物の両面を語るのがかれの常であ  
る——、と他のある人は言う。いつの世にもかかわぬ酒ゆ  
えのわざわい、人間の醜いありさまが描かれ、度を越した  
飲酒がいましめられている。その反面、酒のもつ雰囲気、  
情緒というものも無視されることなく、ほどよく飲むこと  
がすすめられている。これは現代人としても考えねばなら  
ぬことである。もしこの世から酒というものを取り去った  
らどうなるであろう。それでは楽しみとか、情趣とかいう  
ものはなくなる。ものの両面を見る必要がある——、そう  
言う人もある。

こういう感じかた、考えかたはどうであらうか。

わたしが思うに、これでは「兼好法師はよいことを言っ  
てくれた。われわれが言いたいことをよく言ってくれた。」  
と、昔（兼好法師の在世中およびそれ以後）の読者を感じ銘させ  
たゆえんのものが読みとられていないことになるのではな  
いか。兼好法師による、飲酒というものによって代表させ  
られる人間的欲望の肯定が、当時の支配的思想であるところ  
の仏教思想を向こうに置いてのことである事実が、歴史  
的事実が感じ取られる必要があるのではないか。徒然草の  
言うところは仏説とはまたおのずから趣を異にするもので  
あるという意味の大全の発言は、われわれにそういうこと



を教えているのではないか。

もし次のように答える人があれば、それは文芸作品としての徒然草に対するものの見かた、感じかた、考えかたとしては、適切なものというべきではあるまいか。

いわく、兼好法師の言いたいところは、後半にある。

「かくうとましと思ふものなれど、おのづから捨てがたき折もあるべし。」で始まり、「上戸はをかしく、罪ゆるさるものなり：」とつづく。前半で酒飲みを批判しながら、後半でそれをみずから否定する。そこに兼好という人の人間があらわれている。「：：と仏は説き給ふ」という言葉からわかるように、兼好自身が仏教の教えを受け、かれの思想はそこから発している。しかしかれが真実感じているのは、酒を愛するという人間らしい欲望である——と。または、いわく、仏道修業者である兼好が中世という、仏教思想に抑圧されることの多い時代でありながら、人間として生きることの楽しみを飲酒ということに代表させて肯定していることに、そしてその人生観が当時としてすぐれたものであることに驚いた。前半の酒の害を述べた部分は中世人がだれしも考えたところであろうが、後半は兼好でなければいけないことで、当時の支配的思想の束縛をうちやぶって、正しいことは正しいといい、楽しいことは楽しいと言つてのけたかれに、ほんとうの文学者のありかたを見ることができると。

徒然草が仏説とは異質のものであるというのは、それと矛盾し拮抗するものであるということであると思う。両者を、時代の支配的思想とそれへの対立者として把握するのは、正しいと思う。

わたしは、余談にわたるようであるが、日本における文芸論の歴史の上で画期的なものであるといわれる本居宣長の「もののあはれ」論（それは普通常識的に考えられるようなものではないとわたしは考えるのであるが、ここではそれはしばらくおく。）の、真に画期的なものであるゆえんのもの、それが物語のたぐいを以って儒仏の書とは異質のものであるとするところにあると思うが、どうであろうか。

凡此物語を論ずるに、異国の儒仏の書をもて、かれこれいふはあたらず事也。異国の書とは、大きに類のことなるもの也。自然に義理の符合する事はあれ共、それはそれ也。：：前にもいへるごとく、我国には物語といふ一体の書有て、他の儒仏百家の書とは、又全体類のことなる物也。（『紫文要領』）

宣長の場合、排外思想の傾向があまりにもつよく、非文学的なものと文学的なものとの対立が、単純に異国的なものとの日本的なものとのそれに置きかえられてしまっている

きらいがあるが、それはしばらくおく。大全の、徒然草を「草子」として把握し、それを仏説とは異質のものであるとする認識は、宣長の学説に似てユニークなものであるとわたしには思われるのである。

徒然草の酒の段には、どこかユーモラスなところがある。そのユーモアはわれわれの心を広くし、暖かにし、そして偏狭でなくする力を持っている。それがまた、徒然草が文芸作品であるゆえんのものであるが、それは兼好法師がほかならぬ法師であることとどのように関連するのであろうか。わたしの見るところ、兼好法師自身が物に感じるとき「法師のやうにもあらず心にくく覚えしか」(第八十四段)などと平気で言っているように、兼好法師のよさはかれ自身に時に応じて「法師のやうにもあらず」あり得たところにあると思われる。いいかえると中世の僧侶らしい僧侶とは異質の存在であつたところにあると思われる。しかるに世間には兼好法師をかの道元のごとき人と同一視し、徒然草をかの正法眼蔵のごときものと同質のものであるかのように取りあつかう人が、あるがこれはどうであらうか。

端的に言つて、正法眼蔵の中に徒然草の酒の段のごときものが見いだされるであらうか。酒の段のユーモアが見いだされるであらうか。

(二九六五・一二・一六)

本学教授